

論文審査結果の要旨

平成26年2月19日(水)午前10時30分から正午まで、文学部会議室において公開審査会が開かれ、本論文について概要の発表と論文内容についての質疑応答が行われた。そこで検討された主な論点は以下のようなものであった。

- 1 第一章での考証と構成について
- 2 本論文で論じられていない尾崎翠作品の特質との関わりについて
- 3 古典語彙との関わりについて
- 4 先行研究との関連性と多様な解釈の可能性についての認識について
- 5 哲学、文学、演劇論など、外国文化の受容と理解の問題について
- 6 その他の課題について

1 第一章の前半において「第七官(感)」の用例考証(「第六感」を含む)にまず力点が置かれ、明治末期から昭和初期にかけての思想史研究にも資する貴重な例証を多々見出した功績は大きい。神秘思想、骨相学、占星術、超能力、あるいは仏教の唯識論など、極めて幅広い分野の文献を渉猟し、当時の世俗的な流行にも綿密に目配りして、現代におけるいわゆる「第六感」の用法にもつながる検証がなされている。その結果尾崎が『第七官界彷徨』を発表した時点では、「第七官」という語はすでに新鮮味を失い、通俗的な、やや手垢のついた語となっていたことを明らかにした。尾崎が書名に籠めた意味を解く鍵を明示したと言える。ただその考証をさらに進めて、尾崎翠作品の背景となる当時の文学界や思想界での認識を精査するところまで論じておくことが望ましかったと言える。この第一章が全体の約4割弱を占めており、論文としてのバランスにやや欠けているが、この考証までを第一章とし、それを受けての『第七官界彷徨』の解説を第二章とすれば、より整然とした論述となったであろう。ここでは『第七官界彷徨』の内部検証が感想を交えたやや冗漫なものになっている点が惜しまれる。ここでなされた考証を発展させることで、尾崎翠のみならず、当時の文学界全体の思想史的側面に新たな論点を提示する可能性が認められる。

2 本論文で論じられていない課題としては、尾崎翠作品全体に流れていると言われるユーモアの問題がある。初期の作品に対する同時代評においてすでに強調されており、それは現在でも尾崎作品の評価として定着している感があるが、本論文ではそれを前提として特に論点としていないために、論証過程におけるユーモア精神の把握や、作品解釈のあり方に明晰さの劣る部分が生じた点も課題として指摘された。これに対して筆者からは、今回は「詩と病理」に焦点を当てることを目指したために、ユーモアの問題は従来の見解を踏襲したが、そこは今後不可避の課題として認識していることが述べられた。『第七官界彷徨』全体を覆うような肥しのおいなどは、ユーモアにとどまらない本質的な問題に及ぶ可能性もあり、今後のさらなる検証が必要である。

- 3 『歩行』での「おもかげ」、『こほろぎ嬢』での「こほろぎ」や「桐の花」など、尾崎作品には、作品世界を構成し、かつ象徴する語でもある重要な語が散見するが、それらが『伊勢物語』などの古典文学、中でも古典和歌の世界を背景とすることが改めて確認され、従来の見解よりも作品の語り手の深い喪失感や神経症の問題と強く結びつくものであることを示したことは評価される。それら古典の学びのあり方や同時代の近代短歌との関わりへの探求がさらに望まれたところである。
- 4 近年尾崎翠に関する研究は活潑で、本論文で対象とした4作品についても様々の論点からの研究が進んでいるが、本論文ではそれらの成果が価値を見極めつつ取り込まれている。神経症や統合失調症といった病理の及ぼす影響についても調査は行き届いている。ただ、それら先行研究の解釈をいっそう批判的に読み取ることの必要性はもちろん、『歩行』についての「直線構造として読める」という主張についてさらなる検討が望まれるように、作品解釈を速断せず慎重な検討を行うことの重要性が改めて求められた。
- 5 外国文化の受容については、ロシア文学、特に演劇論の問題がどのように尾崎翠作品に投影しているかについての考察が、第四章のチェーホフの受容に関わる議論にほぼ限られている点に疑問が呈された。作品名中の「アントン」がアントン・チェホフから採られたことを手がかりに、当時のロシア文学受容の実態を丁寧に把握した上で考察していることを評価した上で、さらにドイツ哲学や演劇論の理解にまで考察の幅を広げて、そこまで検討してきた3作品の解釈との関連性を追究し、新たな解釈を提示することへと展開させる可能性があることが指摘された。それは今回の4作品の考証に留まらず、尾崎文学の全体像を解明するための議論へと繋がるものであると考えられる。
- 6 このほかにも尾崎翠の古典文学、古典和歌に関わる読書や学び理解のあり方について、より幅広く検証すべきこと、全体として叙述にやや明晰さの欠ける点が散見され、独創性の在りどころが不分明な論点も見られること、色彩語の持つ象徴性について触れている点を総合的な課題として提示すべきこと、資料編で紹介されている資料と論考編との関連性についてのさらなる論及の必要性、などが改善の余地ある点として指摘された。

尾崎翠に関しては近年再評価の動きが活潑で、論文・研究書の公刊、郷里の鳥取県での「尾崎翠フォーラム」の毎年開催、原作に基づく映画制作、マンガの人物描写への利用など、多彩な関心が高まっており、本論文筆者はその中でも有力な研究者の一人としての地位を築きつつある。主観的な論述に偏りがちな近代現代文学研究にあって、作品の生まれた時代の文学以外の多様な文献を渉猟して個々の言葉の意味を深く探求し、見落とされがちな古典文学にも周到に目配りして実証的な論証を積み上げてゆく研究手法は、すでに多くの研究者から高く評価されている。研究対象も尾崎翠一人に留まることなく、広く近代現代文学研究の各分野に展開していくことが予想され、今後の発展が大いに期待されている。よって上記のようないくつかの課題が残るものの、本委員会は本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものと認める。